



## 情報処理学会の会長に就任して

一般社団法人 情報処理学会 会長 ふるかわ 古川 かすお 一夫



皆様こんばんは。日立製作所の古川でございます。この伝統あるITUクラブの例会でお話をさせていただく機会をいただきましたことをまずお礼申し上げたいと思います。今日は学会のお話を中心に、いろいろお話をさせていただきたいと思ひます。

その前に、一言、皆さんにお礼を申し上げたい。

地上波デジタル移行に伴うアナログ波停止という大事業がほぼ順調に終了したということは、本当に放送・通信関係の皆様のご長年にわたる御尽力のたまものと思ひます。私も通信の分野でアナログ通信のデジタル化という仕事を、過去にいろいろやってきましたので、半分ハラハラしつつも、半分は安心していただけましたけれども、問題なく終了したということで大変うれしく思っています。今日の皆様にも感謝申し上げたいと思っております。

今日は、冒頭申し上げましたけれども、学会の話させていただきたいと思ひます。私は、どちらかと言うと経歴としてはコンピュータ関連よりテレコム関連が長いこともあり、電子情報通信学会には40年以上入っております。もちろんコンピュータの方も担当しておりましたので、情報処理学会にも絡んでおりましたが歴史は浅い方です。今、情報処理分野はいろいろな意味で課題が多いということでございまして、お役に立てれば、ということで情報処理学会の会長をお

引き受けした次第でございます。

今抱えている最も大きな課題というのは、会員数が漸減している、ということでございます。特にその中で、企業の会員が減っているということが、極めて悩ましい話で、これは情報処理学会に限らず多くの学会にも共通した悩みです。そういう意味で今日は先輩方も大勢いらっしゃいますし、産業界と学会はどうあるべきなのか？というお知恵をいただければと思っております。

情報処理学会は1960年に創立致しました。1960年はちょうどコンピュータの黎明期でございました。昨年は50周年記念でいろいろなイベントをやりました。全会員数は2万人おります。そのうち1万7,000人強が正会員、これは大学関係の方、企業関係の方です。あと2,400名が学生会員になります。支部は8か所。IFIP\*1という情報処理国際連合の日本でのone and onlyな公認団体でございます。

活動項目は、まず調査研究というのがあって、三つの領域に40の研究會を持っております。登録会員は延べ1万人強です。今年は大震災がございましたので、少し中止等々がございりますが、研究會の開催数は152回。講演會やシンポジウムも約5,000人の参加で行われています。

表1. 研究会一覧

| コンピュータサイエンス領域                 | 情報環境領域                      | フロンティア領域                   |
|-------------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| データベースシステム (DBS)              | マルチメディア通信と分散処理 (DPS)        | 自然言語処理 (NL)                |
| ソフトウェア工学 (SE)                 | ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI)   | 知能システム (ICS)               |
| 計算機アーキテクチャ (ARC)              | グラフィクスとCAD (CG)             | コンピュータビジョンとイメージメディア (CVIM) |
| システムソフトウェアとオペレーティング・システム (OS) | 情報システムと社会環境 (IS)            | コンピュータと教育 (CE)             |
| システムLSI設計技術 (SLDM)            | 情報基礎とアクセス技術 (IFAT)          | 人文科学とコンピュータ (CH)           |
| ハイパフォーマンスコンピューティング (HPC)      | オーディオビジュアル複合情報処理 (AVM)      | 音楽情報科学 (MUS)               |
| プログラミング (PRO)                 | グループウェアとネットワークサービス (GN)     | 音声言語情報処理 (SLP)             |
| アルゴリズム (AL)                   | デジタルドキュメント (DD)             | 電子化知的財産・社会基盤 (EIP)         |
| 数理モデル化と問題解決 (MPS)             | モバイルコンピューティングとユビキタス通信 (MBL) | エンタテインメントコンピューティング (EC)    |
| 組込みシステム (EMB)                 | コンピュータセキュリティ (CSEC)         | バイオ情報学 (BIO)               |
|                               | 高度交通システム (ITS)              | 教育学習支援情報システム (CLE)         |
|                               | システム評価 (EVA)                |                            |
|                               | ユビキタスコンピューティングシステム (UBI)    |                            |
|                               | インターネットと運用技術 (IOT)          |                            |
|                               | ※新設⇒ 情報セキュリティ心理学とトラスト (SPT) |                            |
|                               | ※新設⇒ コンシューマ・デバイス&システム (CDS) |                            |



調査研究は、コンピュータサイエンスと情報環境、フロンティアという三つの領域の中に40の研究会（グループ）を持っています。ちなみに、電子情報通信学会と電気学会の中の情報処理の研究会との関連でございますが、人数的には情報処理学会は約2万人に対し、電子情報通信学会の中の情報処理関係の方々が1万2,000人、電気学会の中の情報処理関係の方が3,500人ということでございます。ということで、日本全体の情報処理の関係者は、3万数千人というところではないかと思っております。

他に、春は東京、秋は東京以外で全国大会をやっております。昨年は50周年大会ということで、7,000人強の方に参加していただきました。また電子情報通信学会ともっと連携を取ってやろうじゃないかということで秋の大会を電子情報通信学会の情報・システムソサエティと一緒にやるFIT\*2という学会を10年やっており、今年は北海道の函館で行われます。また四つの国際会議を情報処理学会が主催または共催しております。ちょうど先週アメリカのIEEE\*3コンピュータソサエティとの共催学会でありますSAINT\*4という学会がミュンヘンで行われ、私も出席し帰って来たところです。非常に活発でいい学会だったと思っております。

定期刊行物は、会誌以外はオンライン化されております。いわゆる電子図書館、情報学広場というところに納められております。他に会誌と論文誌が定期、不定期で両方出ております。また「確率統計」「離散数学」「情報ネットワーク」「メディア学概論」などのIT関係のテキストブックを中心に書籍の発行をしております。

他に、情報規格調査会というのがございます。ここでは61社の方々の御参加をいただいて、国内委員会を中心に約1,000人以上の委員の方々とJTC 1\*5関連の国際標準化の活動をしております。またこの方々を中心に、日本の標準化におけるアクティビティを高めようと頑張っております。特にJTC 1の下にあるSC：サブコミティの議長も3名出ているということでかなり国際的に幅広く活動していただいております。

以上が基本的な活動の状況で、次はトピックスでございます。昨年（2010年）、50周年の記念事業をいろいろやらせていただきました。記念式典や総合大会の他、ユニークな試みとしてはコンピュータ将棋とプロ棋士の記念対局というのを

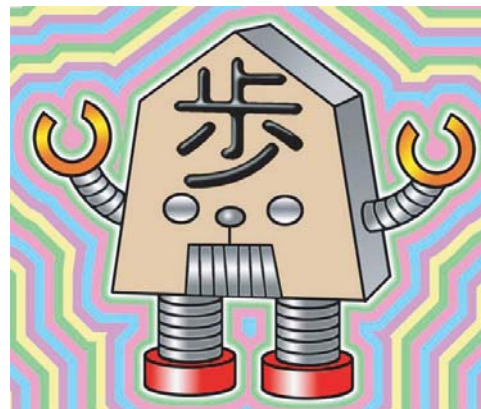


図1. コンピュータ将棋のイメージキャラクタ

やりました。もうひとつ特筆すべきことは、公益法人改革に伴い昨年の7月1日から一般社団法人に移行しました。

特別なイベントとして「コンピュータ将棋とプロ棋士との記念対局」を行いました。対局の概要をお話ししますと、持ち時間を3時間、秒読み60秒ということで、清水女流王将先手で始めました。長時間に及ぶ激闘の末、86手でコンピュータ将棋の「あから2010」が勝利しました。この「あから2010」は「激指」「GPS将棋」「Bonanza」「YSS」という四つのコンピュータプログラムの合議制でやったものでございます。コンピュータが勝ったということで、マスコミの皆様にも取り上げていただきました。コンピュータに負けるというのは随分悔しかったと思うのですが、そういうことは一切表に出さない清水女流王将という方は極めて素晴らしい方だなと思いました。後でお話を伺ったら、人との対局は大体次の手が読めるけれども、コンピュータの場合は全く読めない手が出てきて、今回コンピュータとの対戦は初めてということもあり、大変困惑されたというようなことをおっしゃったので、そういうものかと思いました。

学会運営という視点で幾つか問題がございます。一番大きな課題としては会員数の推移で、図2の一番下の青いところが学術界に属する会員で、二番目のところが会員数100名以上の企業に属する会員、そして一番上が100名未満の企業に所属する会員でございます。極めて顕著なことに、会員数100名以上の企業に属する会員がコンスタントに減っているということが問題でございます。学会としても手をこまねいているわけではございません。

社会へのPR・提言、政策提言とか情報発信とかコンピュ

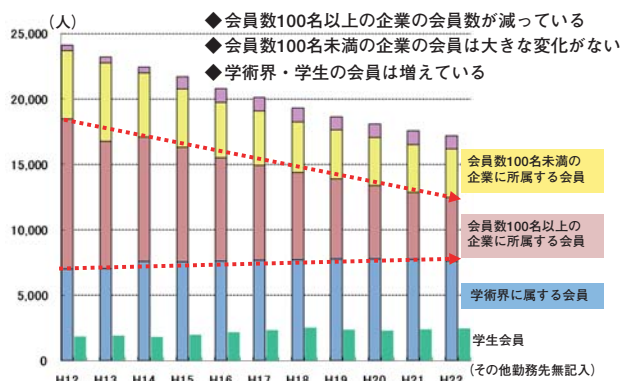


図2. 課題：会員数の推移

一タ将棋とかの非会員へのPRに努め、学会に対するいろいろな注目度を高めるとともに、付加価値をつけるということをやっております。また、学会誌の価値の向上ということで、会員企業向けの特集とか、冒頭のコラムに有名人の方をお願いしたり、季節感のある特集を組むような工夫をしております。もうひとつ企業の方々への施策としてITプロフェッショナル向けの価値向上のために、「デジタルプラクティス」を発行しております。そういうところで、今一番話題になっている話、例えば日本のソフトウェアが世界とどう戦っていくのかとか、XML<sup>\*6</sup>がどこまで発展していくのか、というような企業の方にとっても注目されるようなテーマを季刊で取り上げ発行しております。他に、ソフトウェアジャパンという、企業の方が関心を持つようなテーマを選んだシンポジウムや、秋に5回、6回の連続セミナーというものもやっております。去年はセミナーのテーマとしてクラウドを取り上げました。シンポジウムについては、私自身は2,000名以上来ていただいてもいいと思ったイベントでしたが、まだまだ参加者が500名強でございました。また、ITフォーラムという、視聴覚障害者の方々向けのコンテンツ読み上げソフト等を使ったCSR<sup>\*7</sup>的な活動もやっております。一方、高度IT人材資格制度ということで、現在、国が情報処理試験をやっておりますけれども、もう一段上の資格制度ができないかと取り組んでおります。しかし、なかなかこういう資格制度というのは、規制緩和の流れの方向とは違ふよということで、少し苦戦しております。もう少し情報処理の技術者の方々の方が誇りを持ってできるような形にならないか、いろいろな資格制度を考えていきたいと思っているわけでございます。

学会の概要としては以上でございます。

6月に会長を引き受けさせていただいた時の挨拶で申し上げましたが、今回の大震災で情報通信の持つ意味が、随分見直されたのではないかなと思っております。即時系がどんどんダウンしていった中で待時系であるインターネット系が相当頑張ったということです。オリジナルなインターネット、ツイッター、フェイスブック、又は放送的な使われ方をしているインターネットが非常に頑張った、ということが言えると思います。最初、電力会社さんが計画停電を実施する時に「ホームページにアクセスして下さい」ということをテレビ、ラジオで周知しようとした。電力会社のホームページと言われても皆さん分かるのかな？と思っていたら、案の定真夜中になって大騒ぎになり、結局最初の計画停電というのはキャンセルになったわけです。世の中にはホームページを知らない方もまだまだたくさんいるわけで、そういうデジタルデバイドの問題というのを改めて浮き彫りにされたんではないかと思えます。そういう意味でも、もう一度情報処理とか電気通信というものを今回いろいろ考えさせられたわけでございます。私ども情報処理学会も東日本大震災の復興支援委員会というものも設け、東北地方で何ができるかということ具体的に検討しております。そういう中でやはり情報通信の在るべき姿というのを見ていきたいと思えます。

私の2年の任期中三つの目標を掲げています。①魅力ある学会の構築、②グローバル化の推進、③社会への提言の強化、です。まず「魅力ある学会の構築」ですが、若い企業人は、学会に入っていて何のメリットがあるのか？というのが分からない点が多いのではないのかと思えます。インターネットがそれ程発達していなくて、情報入手することがものすごく大変な時代は、かなり最新の情報を入手できる手段になっていたと思います。しかし今は、特に若い人はインターネットで何でもググってできてしまいます。そういう意味で今いろいろな面で学会が劣っている面もあるんじゃないかなと思ひ、新しいコミュニティ作りという視点で施策を考えたいと思ひます。とにかく「魅力ある学会の構築」ということを掲げました。

次の「グローバル化の推進」ですが、学会そのものは国内の学会ですが、もっと開かれた学会になるべきであろうと思っております。学会の論文誌の世界にはインパクトファクターという評価指標があり、ある米国の会社が学術誌を格付けしています。どういう格付けの仕方をするかと言いますと論文誌に出た論文が、世界中でどのくらい参照されたか、cite



(引用) したかという基準で格付けしています。格付け機関に格付けされることについては学会でもいろいろな議論がありますが、それがグローバルスタンダードになっているとしたら、それからは逃げられないのであれば、むしろあえて挑戦する必要があるだろうと思うようになりました。国内の学会の雑誌と言えどもそれなりにグローバルに評価されないといつまでたっても学会自身も評価されないと思います。そういう視点で他の学会を調べてみて、私がびっくりしたのは日本化学会の学会誌というのは、国内誌そのものが英語なんですね。あれは本当に素晴らしい。それも相当前から英語なんです。化学の方々のノーベル賞受賞者が輩出しているということも無縁ではないのではないかと？我々情報処理の世界はノーベル賞の対象ではないけれども、グローバルに理解してもらえないと評価されないのではないかとということで、グローバル化を推し進めようと思ってやっています。

英語の論文誌の評価が上がると海外からの投稿が異常に増えてしまうという懸念もあります。したがってグローバル化に反対している方々は混乱を心配して、むしろインパクトファクターなど取らない方がいいともおっしゃいます。だけど、そういうことを言っているといつまでもグローバル化しないし、あえて、そういうところと戦わなくてはならないんじゃないかなと思っております。

三つ目が「社会への提言の強化」ということでございます。

学会も社会の公器でございますので、対外的な発信をもっと強くやるべきだと思っております。先日コンピュータウイルス対策問題で、本当に意図的なウイルスなのか単純な設計不良なのか分からない時はどうするんだ、という法律の問題に関しても問題提起をしたりしております。

いずれにしても電子通信・情報処理業界が戦後の復興を牽引した一つの産業であったわけですが、今、日本は再び非常に厳しい状況に面しています。復興再成長に向けて再び電子通信・情報処理分野が主役として牽引すべきと考えます。情報処理学会、電子情報通信学会含め業界として頑張っていきたいと思っておりますので、今後とも皆様の御指導、御鞭撻をよろしくお願い致します。

(2011年7月26日 第393回ITUクラブ例会より)

#### 略号

- \*1 IFIP : International Federation for Information Processing
- \*2 FIT : Forum on Information Technology
- \*3 IEEE : Institute of Electrical and Electronics Engineers
- \*4 SAINT : International Symposium on Applications and the Internet
- \*5 JTC 1 : ISO/IEC Joint Technical Committee 1
- \*6 XML : Extensible Markup Language
- \*7 CSR : Corporate Social Responsibility